

# 「建国後十七年」と「老作家」

—巴金を中心にした考察 (1)

弓 削 俊 洋

## 1. 「建国後十七年」研究の現状—私的整理

本稿は、1949年から66年まで、すなわち中華人民共和国建国から文革までの「十七年」における文学者の「抵抗」の足跡を「老作家（既成の大作家）」、特に巴金の論説によって概観しようというものである。

この「建国後十七年」について中国では、1990年代以降、「百花斉放・百家争鳴」（以下「百花斉放」と略称）や「反右派闘争」関係の資料集や回想録などが相次いで出版され<sup>1)</sup>、歴史の中に埋もれていた事実や作品が公にされるようになった。

日本でもこの時期の文化政策や知識人に関する研究が着実に進展しているが、なかでも丸山昇（敬称略 以下同様）は明確な問題意識の下に「十七年」に関する系統的な仕事を積み上げてきている<sup>2)</sup>。その仕事の全体については本人の著作及び宇野木洋の整理<sup>3)</sup>を見ていただくとして、ここでは私の関心にひきつけながら丸山の言う「十七年」研究の意味を確認しておくにとどめる。慎重で緻密な論の展開を特徴にする丸山の文章を敢えて簡略化していえば以下のようになる。

改革開放後の中国においてもイデオロギー分野での「ブルジョア自由化」批判、「四つの原則の堅持」という原則は変わっておらず、しかもその原則を支えている基本的論理は「十七年」間に形成されたものである。この事実が示すよ

うに、「十七年」の歴史はいまの中国にも複雑な影を落としており、中国の現在に対する認識や未来についての予測をより正確に行うためにも、この時期の論理や思考方法の構造に対する理解を欠くことはできないのである<sup>4)</sup>

——以上が丸山のいう「十七年」研究の現代的意義であるが、同時に注目すべきは、こうした研究が、困難な環境下で「十七年」や文革の時代を問い直すとする中国知識人に対する共感や信頼に基づいている点である。そのような知識人による代表的な論考が、「『忘却』を拒絶する知識人よ、苦しい努力で精神的遺産を引き継ごう」（銭理軍著、丸山昇訳<sup>5)</sup>）である。

同論文に於いて銭理軍（北京大学教授）は、建国後の歴史を真剣に反省し整理することを中国人が怠っており、このような「全民族的な忘却」のために、反右派や文革などの歴史的誤りを生み出した文化観念や制度上の誤りが現在に至ってもなお是正・変革されておらず、21世紀においても前世紀の悲劇が違った形で再演されることさえ十分にあり得ると警告を発し、「全民族の精神的傷痕を掘り返し、その中の滴る鮮血を正視し、痛ましい歴史の教訓を総括することを敢えてするかどうか、それは一民族が真に苦難を通じて成熟に向かうかどうかの重要な標識である」と主張している。

このような危機意識とそれに基づく知識人たちの奮闘への共感が丸山の研究の根底にあり、それは「状況が大きく変わると先ずそれを追うことのみで急で、それまでの状況との断絶と継続を正確に分析し、それまでの視角や認識をどの点でどう改めなければならないかの検討はおろそかにしがち」な「我が国に根強い精神的風土」や「学問のあり方」への批判として展開していく。このことから明らかなように、丸山の研究は日本の知識人としての責任の自覚に基づくことも忘れてはなるまい。

以上の問題関心や責任感による丸山の研究は、主に建国後の中国が胚胎していた「可能性」を阻む（阻んだ）もの＝「負の遺産」への検討を主要な対象として展開されている。丸山の文章をそのまま引用すれば、「正の遺産を正当に位置づけるということよりも、負の遺産が生まれた過程自体とそうさせた力および論理の構造とその歴史的・政治的・人間的等々多様な背景との複合した総体、

いわばメカニズム全体を、事実在即して明らかにすることにある。」<sup>6)</sup>

その際の主要な資料が最近多く刊行されるようになった回想録であり、その理由は「公文書・議事録の類は、たとえば当事者個人の見解・態度の内面等に関しては必ずしも一次史料とはいえず、むしろ回想記の類の方が、それが持つ偏差を考慮に入れつつ利用すれば、歴史の理解に有効な場合もあるのではないか」<sup>7)</sup>というところにある。

以上の丸山の研究によって、負の遺産を生み出す「メカニズム全体」が次第に明らかにされつつあるが、更にそれを補完し発展させる立場から「十七年」研究に取り組んでいるのが、宇野木洋である<sup>8)</sup>。

「補完」「発展」に関する宇野木の主張は全部で5点にわたっているが、やはり自己の関心に引き付けながらごく簡単に紹介すると、丸山の論考を高く評価しそれに大いに学びながらも宇野木は、丸山の論考が「総体としてみた場合、『可能性を阻む（阻んだ）もの』に軸をおいた検討に、自己限定して展開している傾向が強い」と指摘する。その上で「可能性の存在の側面に関して、より具体的にスポットをあてる必要」、第二に「その時点における個々の文学者の手による理論的営為自体からの検討」の必要性を新たな課題として提起している。負の遺産とともに正の遺産に、回想録とともに当時の文章にも具体的な検討の光を当てる必要を主張しているわけである。(なお時代的には、多種多様な可能性を備えた「時代」である「百花時代」=「百花斉放」期や「建国初期」への検討を想定している)。

実はこうした「正の遺産」への注視は、中国の知識人の側からも提唱されている課題であり、前出の銭理軍がその代表である。

魯迅や周作人の研究で知られる同氏は、「精神界の戦士の苦闘の跡を追い、精神的系譜をつなぐ」ことを近年の学問的課題として設定し、百花斉放期の北京大学における「思索者」の言論、文革期における「在野の思潮」を掘り起こす仕事を精力的に進めている。

以下はその彼がなぜ「精神界の戦士の苦闘の跡を追い、精神的系譜をつなぐ」ことを自分の学問的課題とするに至ったかを述べる感動的な一節である。

1988年、中国大陸には「反右派運動」をあらためて振り返る数冊の本が、つぎつぎに出版された。(略)人々は、1957年の中国において、夭折した思想解放運動が一度あったことを驚きとともに発見した、——それは五四に呼応しつつ、高度に集権化された社会主義国家において、思想の自由をかちとり、新たな「啓蒙」を進めようとするものだった。(略)

(反右派運動を振り返る本の) ある若い執筆者はこう書いている。

「過去において私はずっと、五、六〇年代の知識人はみなすっかり飼い慣らされ奴隷化してしまっており、彼らはわれわれが手本とするに足りる思想的遺産を残してくれなかった、われわれが新たに思考する時、目の前にあるのは一面の精神的廃墟で、すべて一から始めなければならないのだと思いこんでいた。1957年の先駆者の「復活」は自分は浅はかであったことをはっきり知らせてくれた。(略)

ここでは中国現代思想史上の重大問題が触れられている。「死に至るも屈しない者」が「秘して発表されず」、思想的先駆者が隠されて抹殺されて、彼らの思想的成果が後人には知られない。これでは思想が始終中断されることになり、各世代の人間は先人への思考がすでに到達した高さから引き続き前進することが出来ず、そのつど「一から始め」なければならない。これは中国の現・当代思想が終始低いレベルで繰り返しを重ねることの重要な原因であるに違いない。

そしてこの精神的伝統における硬直した切断が民族精神全体に与える損傷は、魯迅が言うように、さらに大きいのかも知れない。「信念が堅固ですぐれた者」の「滅亡」は、必然的に妥協・人受けのする偽善の風を盛んにし、「命あつての物種」主義を蔓延らせ、「ぐらぐらしている者をますます墮落」させる。これは実際民族精神の墮落でもある。「もし中国が滅びるとすれば、この政策を採ったもののせいです」。——これを簡単に憤激の言と見なすことは出来ないのである。(略)

魯迅を研究する学者の一人として、私の思考はやはり魯迅から出発する。魯迅は20世紀初頭中国の「近代文明」の道を検討したとき、「第一は人を立

てる事にある。人が立てばすべてのことが興る。その方法はというならば、必ず個性を尊び精神を発揚せねばならぬ」という理想を提出し（「文化偏至論」）、それによって現代中国の歴史に「個人の精神の自由」の旗を高く掲げた。魯迅は、「人を立てる」という理想を実現しようとするれば、鍵は一群の「精神界の戦士」がいなければならないということだと考えた。（略）荒野の中国にもやはり精神界の戦士の最初の一群が現れ、しかも焼けつくような期待の中に、つぎつぎと後継者が生まれ、中国はついに魯迅を先駆とする精神界の戦士の系譜を持った。

しかし（人民共和國建国後の中国に）出現したものは、精神界の戦士が懲罰され、改造され、やがて肉体と精神の死に至しめられるという大悲劇だったのである。私の問題はこういう事だった、これはこの歴史（文革の歴史を含む）には、一面の精神的荒野しかないことを意味するのだろうか、大量の精神が奴隷化され死亡したこの時に、「独立した精神、自由な思想」はまだ存在しているのだろうか、われわれの今日の思考は、また「一から始め」ねばならないとでもいうのだろうか。……こうして私は自分に「魯迅式精神界の戦士の跡を追ひ、精神的系譜をつなぐ」という研究課題を課し、私の困難な思想的学術的探求を開始した<sup>9)</sup>

非常に長い引用になったが、私の最も感銘を受け刺激を与えられた箇所であり、その感動を銭論文未読の方にも伝えたいために他ならない。ただ、論の展開を辿っていくのにはこの文章はやや難解であるので、くどくなることを承知の上でここでの主張を要約してみる。

- ① 近現代中国にも「独立した精神、自由な思想」をもつ「精神界の戦士」とかれらによる「思想解放運動」が存在した。
- ② たとえば民国時代には、魯迅とその後継者たちが次々に現れて「精神界の戦士の系譜」が作られた。
- ③ 人民共和國建国後は、「精神界の戦士が懲罰され、改造され、やがて肉体と精神の死に至しめられるという大悲劇」が演じられたが、にもかかわら

ず精神界の戦士は存在し続け、たとえば1957年には夭折したとは言え人々を驚かす思想解放運動が繰り広げられ、手本とするに足る精神的遺産を残しているのだ。

- ④ 問題は、こうした事実が「秘して発表されず、思想的先駆者が隠され抹殺されて、彼らの思想的成果が後人には知られない」ことである。
- ⑤ なぜなら、これでは「思想が始終中断されることになり、各世代の人間は先人への思考がすでに到達した高さから引き続き前進することが出来ず、そのつど『一から始め』なければならない」からだ。
- ⑥ これが中国の当代思想が始終低いレベルで繰り返しを重ねることの重要な原因であり、精神的伝統における硬直した切断が民族精神全体に与える損傷は大きく、「命あつての物種」主義を蔓延させ、民族精神の墮落を招き、中国を滅亡へと導くのだ。
- ⑦ このような民族的忘却を避けるために、「魯迅式精神界の戦士の跡を追い、精神的系譜をつなぐ」という研究課題を課し、困難な思想的学術的探求を開始した。

こうして「百花斉放」期の北京大学での言論や文革期の死を賭して行った「言論」の掘り起こしと再評価に銭理軍は取り組み始めた。言うまでもなく「正の遺産」を再評価するかれの仕事は中国知識人としての責任感に基づくものであるが、それは同時に我々日本の研究者にとっても魅力的な「学問的課題」であり、ここに「十七年」研究の積極的な意味も見いだせると私は考えている。

## 2. 「建国後十七年」研究に関する私的な展開と課題

以上のような日中両国の研究者の仕事を通じて、「建国後十七年」の状況と研究課題とが次第に明確になりつつあるが、本章ではこれらと関連させながら、自己の研究について総括し、今後の課題を確認しておきたい。

もちろん銭理軍や丸山昇の研究が具有する鋭敏な問題意識、緻密な分析と論理展開には遠く及ばないが、私はこれまで「建国後十七年」に対する関心から

「十七年」に関する論考を幾つか発表してきた<sup>10)</sup>

なかでも、「正の遺産」(丸山昇)、「可能性という側面」(宇野木洋)、「思想的遺産」(銭理軍)への関心から、「百花斉放」期の文学・芸術を主な対象とする研究を行ってきたが、それらはすべて「抵抗」「風刺性」という視点から同時期を振り返ろうというものであった。具体的には、

1. ジャンルでは、「理論」だけでなく「作品」にも着目し発掘する
2. 作品では、「文学」だけでなく「芸能」にまで広げる
3. 作家では、「新人」「中堅」だけでなく「老作家」も視野に入れる

というものであり、これらを通じて「負の遺産」だけでなく「正の遺産」にも光を当て再評価することを目的としていた。

このような研究を行う動機は、第一に、中国文学と中国人の風刺精神に対する関心があったからである。「文学における風刺の尊重というのは、文学と政治の問題に対しての中国的解答である。文学作品において、風刺性を高く評価しようとすることは、観点をかえていうならば、文学は封建社会のひずみを是正させるべき知恵として存在するのだ、ということをも主張するものである。」<sup>11)</sup>という捉え方に問題がないとするならば、その伝統は現代にも継承されており、たとえ個々人の抵抗が一時的、瞬間的なものであったにせよ、人民共和国の歴史を通して見れば一本の道に貫かれていることを実証していきたい、換言すれば現代にまで息づく風刺の伝統を体系的、系統的に明らかにしていきたい、という思いがあった。

第二の動機としては「死滅する文学」<sup>12)</sup>、「方向性が定められ」「パターン化した」「単純な構造」<sup>13)</sup>あるいは「既成の大作家は沈黙した」<sup>14)</sup>といった表現に代表される「十七年」文学(芸術)への「完全否定」や「無視」ともいえる評価に対する疑問や反発があった。もちろんこうした評価は「当代文学」のある一面、あるいは主要な一面を特徴づけることを否定できない。また、「抵抗」という正の遺産への目配りも見られるし、それゆえに「可能性」を否定した「政治」への批判、何よりも文学者と文学を襲った悲惨さへの悲しみと憤りから、敢えて激烈な表現を用いていることは理解しているつもりだが、にもかかわらず私

はやはり自分の内に起こる疑問や反発を抑えることは出来なかった。ほんとうに「十七年」期に文学（芸術）は「死滅」したのだろうか、「既成の大作家は沈黙した」だけなのか――。

このような疑問や不満が私の場合は、「十七年」への関心を強める契機になったように思うし、その結果「面白い」と感心する作品にも出会えたし、それらを創作した作家達の「したたか」で「しなやかな」精神にも触れることができたと思う。

その最初の体験は「買猴兒」という相声作品とその作者何遲の鮮烈な生き様だったのだが、この点については今まで幾度も書いてきたし、本論の主題ではないので、ここでは以下の数点を確認するに止めておき、詳細は注10)に掲げた拙稿を参照されたい。

1. 「買猴兒」（1953年作）は中国に蔓延する「無責任さ」「いい加減さ」を風刺した漫才であり、奇想天外なストーリーと登場人物たちの間抜けで荒唐無稽な言動とが受けて「十七年」最大のヒット作となった。
2. しかし反発や非難もあり、『文芸報』誌上の論争（1956年）<sup>15)</sup>では、「国家、幹部、人民に対して完全な悪意に基づく嘲笑を行った許しがたい作品であり、これらの誤りは『笑いを弄ぶだけで厳肅さが無い』作者の姿勢に因るものだ」という激しい非難を浴びせられた。
3. こうした厳しい環境にあって作者は、より風刺性を強めた「統一病」を創作し、1955年末から56年にかけて急速に推進された「社会主義的改造」（農業の集団化、商店・工場等の国営化）の行き過ぎを批判した。
4. しかし当時の「文化・思想部門の政治的責任者」周揚の逆鱗に触れて公開が叶わず、さらに反右派闘争の中で作品は「毒草」、作家は「右派」として受難を被ることになり、以後20数年間に渡る迫害の中で何遲は下半身不随となる。
5. 文革後、「統一病」はようやく封印を解かれて公表され、<sup>16)</sup>同時に名誉回復された何遲は風刺相声の創作を再開して「第二の青春」と呼ばれるほどの作品を残した。



以上のように何歳の生涯は強靱な「風刺精神」を体現しており、この精神に支えられた「買猴兒」などの作品はユーモアと機知に溢れ、構成や会話などにも意表をつく展開がしばしば見られる。かつて「買猴兒」に対して王蒙は「解放以来三十年、われわれの文学創作において越えることのできぬ高い峰といふべきは相声『買猴兒』のみだ」<sup>17)</sup>という高い評価を与えたが、実際この作品を読んで私は「こんなにもおもしろい作品が現代中国にあるのか」と驚いたし、この驚きと喜びが中国漫才にのめり込ませる契機にもなった。文学から芸能も含めて作品の発掘・再評価の必要性を説くのも、このような経験に基づいているからに他ならない。

### 3. 「老作家」に対する評価の問題—老舎・巴金の場合

作品の発掘や再評価に加えて私が注目しているのは、いわゆる「老作家」評価の問題である。極端な例ばかり挙げて恐縮だが、『新しい中国文学史』（前掲注14）は建国後の巴金、郭沫若、茅盾、沈從文、老舎などの「既成の大作家」を評して以下のように記す。

既成の大作家は沈黙した。郭沫若は中国科学院長に、茅盾は文化大臣に就任して創作活動から離れ、巴金は社会主義賛美のルポルタージュのみで小説はほとんど書いていない。沈從文は共産党の洗脳に耐えきれず自殺未遂を図り、その後は同郷人である毛沢東じきじきの勧めにも関わらず創作の筆を断って北京博物館の学芸員となった。

唯一の例外が老舎といえよう。彼は人民共和国成立時には、家族を北京に置き単身ニューヨークで作家活動をしていたが、周恩来の名指しによる帰国要請を受けて1949年12月に北京に帰っている。帰国後は小説家から戯曲家に転じ、『竜秦溝』（1951）『茶館』（1957）など北京を舞台に建国前後の光明や暗い過去を描いて共産党に忠誠を尽くし、1951年には北京市人民政府の市長彰真から“人民芸術家”の称号を授与された。のちに文革が始まるや真っ先に紅衛兵のリンチを受け、死体となって発見されている。

この部分だけを見れば、巴金、郭沫若、茅盾、沈從文たち「既成の大作家」は(様々な理由からではあるが)殆ど作家らしい活動をせず「沈黙」を守ったことになり、過去の栄光に比してかれらの「十七年」はまことに寥々たる有様だったとの印象が強い。もちろんここで対象にしているのは「作品」であるし、また先述したように他の部分では共産党政府の過酷な弾圧が続いた事実の指摘、それゆえにやむを得ない選択だったという作家の内面の苦悩も描かれるのだが、しかし建国後の老作家が「精神界の戦士」とは対局に位置していたという印象は免れない。

特に老舎は最も惨憺たる評価を下されており、「共産党に忠誠を尽くし」ながらも文革では最初の犠牲者となるという、極論すれば「ピエロ的」役割を演じたにすぎないと言える書き方がされている。

もちろん人民共和国の理想を宣伝し、党や毛沢東を讃美する膨大な著作を残している点、作協や文連などの文学団体・大衆団体・政府関係機関の要職を歴任した点、さらに北京市政府から「人民芸術家」の称号を授与された点などから見れば、建国後の老舎を「共産党に忠誠を尽くした」と評するのは間違いではない。

また、中国でも党や指導者達の「徳」を讃美し宣伝する「歌徳派作家(賛美派)」という言い方がされており、管見の限りでは1980年代までは(少なくとも公的には)、それゆえに老舎の「十七年」が称賛されるという評価が主流を占めていた。

たとえば巴金も「老舎を思う」<sup>18)</sup>という文章中の一節で、悲惨な死を遂げた旧友の「十七年」に積極的な意味を見いだそうという狙いからであろうが、「芸術で政治のために奉仕した」半生を賞讃して「熱烈に新中国を称えた最大の“歌徳派”だった」と記している。

さらに胡絮青(老舎夫人)や曹禺によると、実は作家本人も「歌徳派」を自称していたらしく<sup>19)</sup>「私はもともと無党派の人間だったのだが、今はひとつの派に属するようになった。“歌徳派”だ、共産党を讃美する“歌徳派”だ」との言葉が紹介されている。この老舎の科白はそのまま作家辞典<sup>20)</sup>に引用されて

「熱烈に共産党を讃美し、新社会を讃美した」と、「歌徳派」作家の功績が強調されるわけである。

このような評価に異議を唱えたのが、『文芸報』1989年第三期に掲載された王行之論文<sup>21)</sup>であり、歌徳派としての生き方が「独立心と批判精神、歴史に対する作家の責任感」を消滅させて「芸術的停滞」を招いたと厳しい評価を下している。

この王行之論文は遠慮仮借のない批判を行ったという点で、以後の老舎研究に及ぼした影響も小さくないのだが、「十七年」の老舎を「一貫して情熱的に毛沢東を称えた歌徳派作家」と称していることから分かるように、党や毛沢東に忠誠を尽くしたという点では以前の評価を継承している。いわば「歌徳派」というコインの裏表をなす評価であり、また、「歌徳派」に意味を見いださないという点では、『新しい中国文学史』と同じ観点、通底する視点を持っているといえるだろう。

90年代に入ると、「現代作家研究において、変化が最も大きく、進歩も最も早い」<sup>22)</sup>と言われるほど老舎研究には大きな進展が見られ、実際「十七年」期の老舎に関しても「歌徳派」以外の面に光が当てられるようになった。私の目にしただけでも、劉明・石興澤著『人民芸術家・老舎』<sup>23)</sup>、陳徒手著『人有病 天知否 1949年後中国文壇紀実』<sup>24)</sup>、範亦豪著・伊藤敬一訳「老舎二題——老舎生誕百年を記念して」<sup>25)</sup>などが、「百花斉放」期の言説をとりあげながら、大胆に「直言」する老舎像を提出している。

それらに触発されながら私も「十七年」期の老舎に関して検討を加えてきた結果、やはり「百花斉放」期にみられる言説は「共産党政府に忠誠を尽くした」以外の老舎を伝えていて注目すべきだという結論を得た。

と言うのもこの時期の老舎は、作家の創作環境を改善するために多様な問題を取り上げて「直言」しているからであり、その内容は以下のように要約できる（詳細は前掲研究書や注10）掲載拙稿①②を参照していただきたい）。

1. 作家は政治運動や社会活動に忙殺されているため本来の仕事である創作活動ができない、作家に創作のための時間を与えよ<sup>26)</sup>

2. 建国後の文芸には、執筆から発表後までの様々な過程において種々の論理的・行政的圧力が加えられ、作家の創作活動は厳しく規制されている。
3. たとえば作者の意向を無視した改作が横行しており、自作の戯曲『春花秋実』も、俳優たちの干渉による度重なる改作を経て、初稿と最終稿では全く違うテーマになってしまったほどだ<sup>27)</sup>
4. 同様のことは映画のシナリオに対しても行われ、「大改修」「特別改修」などの「改作大会」が演じられた結果、「芸術的美」を一点たりとも見いだせない作品ばかりが公開され観衆からそっぽを向かれている<sup>28)</sup>
5. 演劇の面でも、「悲劇を描くな」（「現実の暗黒面を描くな」という規制が加えられ<sup>29)</sup> 軍が上演を阻止するという事態さえ起こっている<sup>30)</sup>
6. 漫才「買猴兒」に対する「現実を歪曲した」「国家・幹部・人民に対する悪意に基づく嘲笑」といった評価も、風刺の手法を理解しない根拠のない非難だ<sup>31)</sup>
7. このように種々の「社会的圧力」が至る所に存在して、諷刺芸術の発展を阻害し、演劇や映画の不振をもたらしている。
8. 作家たちは圧力に屈して「現実を粉飾する」ことなく、「骨髄に達する」風刺を行え、官僚主義など現実にある「悲劇」をも大胆に描け。

以上が「百花斉放」期における老舎の言説の大要である。並べてみるとそのいずれもが文芸に対する規制（介入、干渉）を問題としており、結局は「創作の自由」の主張へと収斂されていくことが分かる。1957年1月、英字雑誌掲載の「自由と作家」<sup>32)</sup>は、その主張を最も明確に、尖鋭に打ち出した論文として、前掲の研究書などに度々紹介されるものである。以下にその一節を引用する。

行政の干渉は、動機がいかにも正しくても、結局は真の芸術作品を作家が創り出すのを妨げる。(略)やたらに批判ばかりしていたら、良い作品を生む刺激となるどころか、かえってぶち壊してしまうのだ。(略)

どの作家も、自分が好み、十分に掌握している人物、生活、テーマを描かねばならない。作家には当然、完全な自由をもたせ、書きたいものを選ばせ

るべきだ。(略) どの作家も自己の人格を発揮できるよう激励すべきであって、妨害してはならない。文学作品の品格は多様であるべきで、(略)文学創作における多様な流派の発展は奨励すべきであり、反対すべきではない。自由に干渉してはならないのである。

以上の考察から「歌徳派」以外の老舎の側面が明らかになりつつあるが、同時に老舎研究における幾つかの課題も明確にされてきた。

それは第一に、「百花斉放」期における老舎の主張は実体験も織り交ぜながら具体的に問題を提起している点、さらに文学、演劇、映画、漫才など多様なジャンルの問題を例にして語られている点を特徴としており、それだけに同時期の老舎の言動を、様々な会議の席上での発言なども含めて、広くまた緻密に検討していく必要がある。

第二に、「創作の自由」に代表される「直言」は「百花斉放」期に限って見られ、反右派闘争を境にその主張は大きくカーブを切り「歌徳派」の道を再び邁進するようになった、という見方(前掲研究書の共通理解)を再検討する必要がある。「百花斉放」期の主張の中にはそれ以前から唱えていたものもあるし(百花斉放期に、より尖鋭化していることは事実であるが)、以後の言動も含めて、建国後の老舎の足跡を総体として明らかにしていくことが必要である。実は私もまだ「百花斉放」以後については調べきっていないので、隠されたメッセージの解説という視点からの作品再評価も含めて、調査分析を進めていきたいと考えている。

いずれにしても近年の老舎研究は、「歌徳派」というコインをめぐる堂々巡りから大きく踏み出して、作品も含めて「十七年」研究の一つの対象になりつつある。

上述の二つの課題は他の老作家についても当てはまると思うのだが、巴金に関しては少し厄介な問題があって、それをまず見ておかないと次へ進めない。

実は文革後まで生きた老作家の中には「十七年」期を自己否定するものがい

る。その典型が巴金であり、『隨感録』のなかでは、建国後「十七年」の著作を「ガラクタ」と表現するなど殆ど全否定に近い評価を下している。

私はしばらく前、自分の選集を編んだが、大部分の旧作を読み返してみて、1950年から1966年までの十六年間、よくもこんなにたくさんの大言壮語を書き、美しい絵を描いたものだと、われながら驚き怪しんだ<sup>33)</sup>

(建国から文革終結まで) 三十年来、私は、多くのガラクタを書いてきた。……かつて私は大言壮語をかなり書いたが、当時は、それほど張り切っていたのである<sup>34)</sup>

ではなぜこのような「ガラクタ」と自ら断罪しなければならぬものを「張り切って」書いたのか。この点について巴金は、最初は「嘘を信じ」「鵜呑みにしたから」だったのだが、後には「嘘」が「嘘」であることを見抜き、それでもなお自己の安全を保つ保身のために「嘘」を広めたと言う。

私は、嘘を信じ、それを広めたが、それと闘争しなかった。…他人が(赤旗を)「高く掲げ」れば私はそれにぴったり付き従った。他人が「神様」をかつぎだせば、私は恐れ入ってひれ伏した。たとえ疑惑を抱き不満があっても、鵜呑みにした<sup>35)</sup>

あのころ、あの年代、私は嘘のなかで生活していた。嘘を聞き、嘘を語り、初めは嘘を真理と見なしたが、後になると次第に嘘を見抜くようになった。初めは自分を「改造」するためだったのだが、後には自分の安全を保つことを目的とするようになった。初めは嘘を本当として語っていたが、後には、嘘を嘘として語るようになった<sup>36)</sup>

初めは、他人が語るのを聞き、後には他人の尻馬に乗って語り、さらにその後には、自分が他人と一緒に語るといった具合だった。初めは、これは嘘の話らしいぞ、あれは誤伝らしいぞ、そんなふう語るのは事実と合いそうもないぞ、等々の疑いを持った。初めは、他人が嘘を語るのを聞くと、自分でも不満で、態度表明の発言をする気になれなかった。ところが、次々と会合が開かれていく内に、私はついに、「自分の頭で考える」という、

この荷物を投げ捨てなければ、「身軽になって前進」できないと感じるようになった。というのは、私はすでに、知らず知らずのうちに改造されてしまっていたからである。そこで、態度を表明させられれば、その通りにした。まず空論をやって、然る後、嘘を語る。どっちみちみんな同じようなことを言い、新聞を丸写しにしたり、公文書を丸写しにしてもかまわないのだ。数十年間会議に出席してきたが、今日になっても私はやはり、会合が怖い。

私は空論する事、嘘を言うことを会得した。……なぜなら、誰もそんな嘘を真に受けるはずがないことを、私は同時に知っていたからである。空論に至っては、誰もみなそれをお守り扱いにして、日常生活の面では、それを机で拭い（書くことは空論ばかりの意）、それで戸や窓をぬぐう（表面上、空論ばかりならべる）のであった。こうして部屋を清めておけば、「運動」の大神様（指導層）が衛生検査にやってきても怖くはない、という次第である。<sup>37)</sup>

長い引用になったが、一人の人間の精神的崩壊の過程——「嘘」に疑問をもちながらも次第に他人と一緒に「嘘」を広めていくまでに精神が麻痺する過程がつぶさに語られており、そこから巴金の語るような自己崩壊を不断に生み出している社会の不条理も浮き彫りにされているからに他ならない。巴金が生きたのは、社会と個人が一体となって人間の自己崩壊を促している恐怖の時代であり、犠牲となった人間がまた新たな犠牲者を作り出すという「狂人日記」の告発した世界の再来でもあった。したがって当時の状況を勘案するならば、「嘘」を「嘘」として言うことも「やむを得ない」といえなくはないのだが、巴金は、「自分を許すわけにはいかない」と記す。

1950年代に私はよく、中国作家たることは私の誇りだ、と言ったものである。しかし、ああした「鬭争」「運動」に思い至れば、自分が演じたこと（たとえ、やむを得なかったにもせよ）に対し、吐き気を覚え、恥ずかしさを感じる。今日、三十年前に書いた、ああした話を、いまひもといて見ると、やはり自分を許すわけにはいかないし、後世の人に許しを求めようとも思わない。<sup>38)</sup>

非人間的な社会に於ける行動をやむを得なかったと簡単には片づけず、自己の精神の崩壊過程を剔抉していく勇氣には驚嘆するし、この勇氣こそが巴金のヒューマニズムを支えている最大の要素でもあろう。ただ、私が最も関心を持ったのは、「嘘」を「嘘」だと見抜くようになったという事実を繰り返している点である。これはスローガン、美辞麗句を鵜呑みしない「冷静な」判断能力を心の内には備えていた、ということである。だとすれば巴金は「嘘」の欺瞞を暴露し社会の不条理を告発するような「直言」を行っていないのだろうか、覚醒が批判に、抗議に、抵抗に転じたことはなかったのでしょうか。

実はそうした「直言」を巴金は確かにっており、しかもその時期は1950年代と60年代の二回みられるのであるが、この事実は今まであまり顧みられてこなかった。(以下次号)

## 注 釈

- 1) 本稿が特に問題にする「百花齊放」期を主要な対象にしたものだけでも以下のような資料がある。
  - ① 洪子誠著『1956：百花時代』(山東教育出版社 1998年5月)
  - ② 韓秦華主編『探索与代価：1956～1966』(北京出版社 1999年1月)
  - ③ 朱正著『1957年的夏季 从百家争鸣到两家争鸣』(河南人民出版社 1998年5月)
  - ④ 牛漢・鄧九平主編『思憶文叢 荊棘路 記憶中的反右派鬭争』(經濟日報出版社 1998年9月)
  - ⑤ 牛漢・鄧九平主編『思憶文叢 六月雪 記憶中的反右派鬭争』(同上)
  - ⑥ 牛漢・鄧九平主編『思憶文叢 原上草 記憶中的反右派鬭争』(同上)
  - ⑦ 沈久泉他選編『老新聞 共和国往事 1956—1958』(天津人民出版社 1998年9月)
  - ⑧ 段躍編『1957年 烏昼啼 “鳴放”期間雜文小品文選』(中国電影出版社 1998年12月)
  - ⑨ 黃秋耘著『風雨年華』(人民文学出版社 1988年增補再版)
  - ⑩ 黎之「回憶与思考—整風・鳴放・反右」(『新文学史料』1995年第1期)
  - ⑪ 黃偉経「文学路上六十年 老作家黃秋耘訪談録①②」(『新文学史料』1998年第1期～第2期)
  - ⑫ 黃偉経「黃秋耘“遺網”記 老作家黃秋耘訪談録之二」(原載は広東省政治協商會議『同



「建国後十七年」と「老作家」

舟共進）1998年第9期，蕭蔚彬主編『領袖們的千古難題』廣東人民出版社1998年8月に  
轉載）

2) 丸山昇「建国後十七年」關係研究業績

①丸山昇著『文化大革命に到る道—思想政策と知識人群像』（岩波書店2001年1月）

②丸山昇著『『十七年』をめぐる諸問題・その一端』（『東方学』59号 1998年1月）

③丸山昇著「李之璉・黎辛・黎之について」（『日本中国学会創立五十年記念論文集』汲古書  
院 1998年10月）

④丸山昇著『『建国後十七年』の文化思想政策と知識人—序説的覚書』（小谷一郎・佐治俊彦・  
丸山昇編『転換期における中国の知識人』汲古書院99年1月）

⑤丸山昇著「人間ドラマの魅力—『回想録』『自伝』などをめぐって」（『東方』231号 2000  
年5月）

⑥丸山昇著「中国近現代文学分野『期待と不安と』（『東方学』100号特集「21世紀へ向かっ  
て東方学の展望」所収）

⑦丸山昇著「『17年』になぜこだわるか。—『野草』の特集に寄せて」（中国文芸研究会『野  
草』67号 2001年2月）

3) 宇野木洋「問題群としての『建国後17年』 文学状況・私的覚書」（中国文芸研究会『野  
草』67号 2001年2月）

4) 丸山昇著『『建国後十七年』の文化思想政策と知識人—序説的覚書』（前掲注2④）  
p506～507。

5) 銭理軍著・丸山昇訳「「忘却」を拒絶する知識人よ，苦しい努力で精神的遺産を引き継ご  
う」（原題「拒絶遺忘 中国知識界恢復歴史記憶的掙扎」『世界』2001年2月号）

6) 丸山論文前掲注2④。

7) 同前。

8) 前掲注3。

9) 前掲注5 p195～p197。

10) 「建国後十七年」關係拙稿。

①秦兆陽と「組織部」改作問題について（中国文芸研究会『野草』34号 1984年9月）

②相声「買猴兒」の世界（啞啞之會『啞啞』21・22合併号 1985年12月）

③相声「開會迷」と雑誌『人民文学』（中国文芸研究会『野草』38号 1986年9月）

④第一回文代会試論（『愛媛大学法文学部論集文学科編』21号 1988年11月）

⑤封印された漫才—相声「統一病」と作者何遲の受難（『愛媛大学法文学部論集文学科編』  
27号 1994年2月10日）

⑥相声の「戦闘的伝統」—「買猴兒」「統一病」「特大新聞」における諷刺（平成6年度・7

- 年度科学研究費補助金一般研究(C)研究成果報告書『現代中国における〈諷刺芸術〉の研究』  
1996年3月)
- ⑦「芸術」になった相声と慰問活動—1989年北京・朝鮮戦争・中南海（『愛媛大学人文学会  
創立二十周年記念論集』1996年12月20日）
  - ⑧建国後の老舎と相声—笑えない漫才（中国文芸研究会『野草』60号 1997年8月）。
  - ⑨「人民芸術家」老舎の悲劇（社団法人全国日本学会『Academia 学術新報』172号 1997  
年8月5日）
  - ⑩老舎の相声—相声論及び技法に関する考察（『愛媛大学法文学部論集人文学科編』6号  
1999年2月）
  - ⑪建国後の老舎に関する考察—「歌徳派」作家の実像を求めて（『愛媛大学法文学部論集人文  
学科編』1999年9月）
  - ⑫文学理論における諷刺—老舎と諷刺（平成10年度・11年度科学研究費補助金基盤研究(C)  
(2)研究成果報告書『現代中国文学と〈諷刺〉に関する研究』2000年3月）
- 11) 鈴木修次著『中国文学と日本文学』（東京書籍 1978年3月）第二章「風流と諷刺」。
  - 12) 藤井省三『中国文学この百年』（新潮選書 新潮社 1991年2月）第一部「百年の回  
顧」。
  - 13) 竹内実・萩野脩二編著『中国文学最新事情』（サイマル出版会 1987年2月）「編著者まえ  
がき」、萩野脩二著『中国文学の改革開放』（朋友書店 1997年4月初版）第1章「概観」。
  - 14) 藤井省三／大木康著『新しい中国文学史 近世から現代まで』（ミネルヴァ書房 1997年）  
p 201。
  - 15) 怎樣使用諷刺的武器？—对于相声《買猴兒》的討論と題されて、『文芸報』1956年第10  
号，12号，13号，14号の4期にわたり14編の文章が掲載された。
  - 16) 何遲の相声「統一病」は1981年1月『天津演唱』誌上に初めて公開された。
  - 17) 王蒙「对一些文学觀念的探討」（『文芸報』1980年9期 9月12日発行）。
  - 18) 巴金著「我愛我的祖国，可是誰愛我呢？ 憶老舎同志」（『文匯』増刊1980年1月号）。
  - 19) 胡黎青著「党的陽光温暖着文芸界」（『文芸報』1978年1期）。  
曹禺著「我們尊敬的老舎先生」（『人民日報』1979年2月9日）。
  - 20) 『中国文学家辞典 現代第一分冊』（四川人民出版社 1979年12月）。
  - 21) 王行之著「我論老舎」（『文芸報』1989年3期 1月21日）。
  - 22) 張桂興編著『老舎資料考釈(上冊)』（中国国際広播出版社 1998年7月）「序」（舒乙  
著）。
  - 23) 劉明・石興澤著『人民芸術家・老舎』（山東書報出版社 1997年8月）。
  - 24) 陳徒手著『人有病 天知否 1949年後中国文壇紀実』（人民文学出版社 2000年9月）所

「建国後十七年」と「老作家」

収「老舍：花開花落有幾回」。

- 25) 範亦豪著，伊藤敬一訳「老舍二題—老舍生誕百周年を記念して」（『季刊中国』第56号）
- 26) 老舍著「閑談」（『文芸報』1956年第22号 11月30日），「舒舍予代表的発言」（『人民日報』1954年9月18日）
- 27) 「老舍談劇本的“百花齊放”」（『劇本』1957年6月号）。
- 28) 老舍著「救救電影」（『文匯報』1956年12月1日）。
- 29) 老舍著「論悲劇」（『人民日報』1957年3月18日）。
- 30) 「作家曹禺，老舍，臧克家漫談“齊放”与“争鳴”」（『文匯報』1957年4月29日）。  
「編集工作一定要適合当前新形勢」（『文芸報』1957年4号）。
- 31) 老舍著「談諷刺」（『文芸報』1956年第14号 1956年7月30日）。
- 32) 老舍著「Freedom and the Writer」（People's China 1957, 1）。
- 33) 巴金著「未来（説真話之五）」（香港三聯書店版『真話集』所収）。本文中の訳文は石上韶  
訳（筑摩書房）による。
- 34) 巴金著「再論説真話」（『探索集』所収）
- 35) 巴金著「説真話」（同前）
- 36) 巴金著「再論説真話」（同前）
- 37) 巴金著「三論説真話」（『真話集』）
- 38) 巴金著「懷念胡風」（『無題集』）